部門賞　受賞者の紹介

環境工学部門国際交流賞を受賞して

佐藤 春樹
慶應義塾大学システムデザイン工学科

この度は 2012 年度環境工学部門国際交流賞の受賞という栄誉に拝し、大変光栄に思っております。以前から、楯にある鳩と地球のレリーフの美しさに惚れていましたので喜びもひとしおです。私のようなものが頂戴できましたのも、2009 年 11 月に慶應義塾日吉キャンパスにて開催致しました International Workshop on Environment & Engineering – Advanced Sustainable Cities（IWEE-ASC）の実行委員長を仰せつかったことにつきると思います。

従いまして、部門初の国際会議を開催するためにご尽力頂いた実行委員会委員の皆様、当時の役員の皆様、ご指導頂きました部門長経験者の皆様、多くの皆様のご努力の成果に対して、たまたま委員長を仰せつかっただけで私が代表して賞を頂戴しました。

皆様に対し、そして、この国際会議でご発表戴いた皆様、ご参加頂いた皆様に対し深く感謝申しあげます。また、会場設置や運営まで手伝ってくれた当時の研究室秘書や学生諸君に感謝します。

さて、一番感謝したい方がいらっしゃいます。

2012 年度の部門ニュースにも書かせて頂きましたが、神奈川工科大学教授・伊藤定佑先生です。先生が 2005 年度の第 83 期部門長であったときに、環境工学部門の活性化への熱意から、英文ジャーナルの発行準備を進め、部門将来構想検討委員会を設置し、技術委員会の壁を取り払って自由に情報交換する「環境工学サロン」を設置され、4 年後の部門設立 20 周年となる 2009 年に国際会議をするようにと 50 万円を機械振興事業資金に組み入れてくださったのです。

全ては亡き先生が敷いた部門の国際交流へ繋がるレールの上を私がたまたま先頭に立って走らせて頂いただけです。

伊藤定佑先生に心より感謝申しあげます。ありがとうございました。

環境工学部門功績賞を受賞して

川本 克也
(独)国立環境研究所
資源循環・廃棄物研究センター

この度は、受賞の栄誉を賜りまして大変光栄に存じますとともに、部門に関わる会員諸氏に深く感謝申し上げます。私は、資源循環や廃棄物処理等をその活動分野とする第2技術委員会に所属し、2006年度において部門長を拝命いたしました。

部門長就任時の抱負としてどのようなことを考え、この部門ニュースに記したのかを振り返ってみたいと思います（川本：環境と地球 No.17, 1-2〔2006〕）。

その時は、環境工学部門の4つの技術分野について、各々近くはあるが一方で距離感もあるという状況は続くものの、「環境」のための「工学」を担うものとしてわが国でこの分野における機械学会環境工学部門の求心力を増すことを目標に掲げました。それから7年、「環境技術」に対する期待は、温暖化をはじめとする地球規模の環境とエネルギーの課題に取り組む上でおおいに高まったといえます。

東北地方太平洋沖地震と原発事故に起因する放射能の問題がさらに困難な課題をつきつけましたが、技術に対する社会の関心はいや増すこととなりました。

環境というキーワードで集約される総合工学としての環境工学は、ますますその存在感を高めています。また、従来の部門評価で環境工学部門の不得手としていた国際的活動も、その後の関係諸氏のご尽力により実績をあげることができています。

人間の生活と活動にとって今後何が真に価値あることであるのか、その答えは多様でありましょうが、健全で快適な環境であることの重要性は変わらないと思います。

そのような環境をプロデュースする環境工学の新たな方向性を生み出すこと、そして部門の一層の発展を願って、受賞へのお礼とさせていただきます。

環境工学部門技術業績賞を受賞して

江波戸 明彦
㈱東芝　研究開発センター

この度は環境工学部門技術業績賞を頂き、誠にありがとうございます。

「イヤホン再生時の外耳道音響特性に関する研究（伝達行列法を用いた共鳴補正フィルタの導出）」が受賞対象となりました。私は、㈱東芝［研究開発センター／機械・システムラボラトリー］に所属し、機械騒音を対象とした騒音制御技術の研究開発に取り組んできました。

数年前からは人にとっての快適な音環境を意識し、AV音響もユーザ以外には騒音にもなると考え、AV音響に関する空間音場の制御や音質改善にも取り組んでいます。

一見、騒音と音響は別物と捉えがちですが、基盤技術は共有の部分も多く、本研究では人に音が届く最後の空間「外耳道」に着目し、生体を考慮した音の特性評価、共鳴制御による音質改善手法を提案しました。騒音分野で培ったアクティブ制御技術や音響解析技術を音響分野に応用できた点が評価され、うれしく思います。

学会を通じてご指導くださった方々には大変感謝いたします。快適な音環境つくりに向けて、今後もこの受賞を励みに、よりいっそう研究活動に邁進していきたいと思います。